

農業技術情報

令和4年8月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター
十勝東部支所 015-572-3128
JA十勝池田町 572-3131
高島支所 573-2111
池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の状況（池田町 8月15日）（ ）内は平年値、

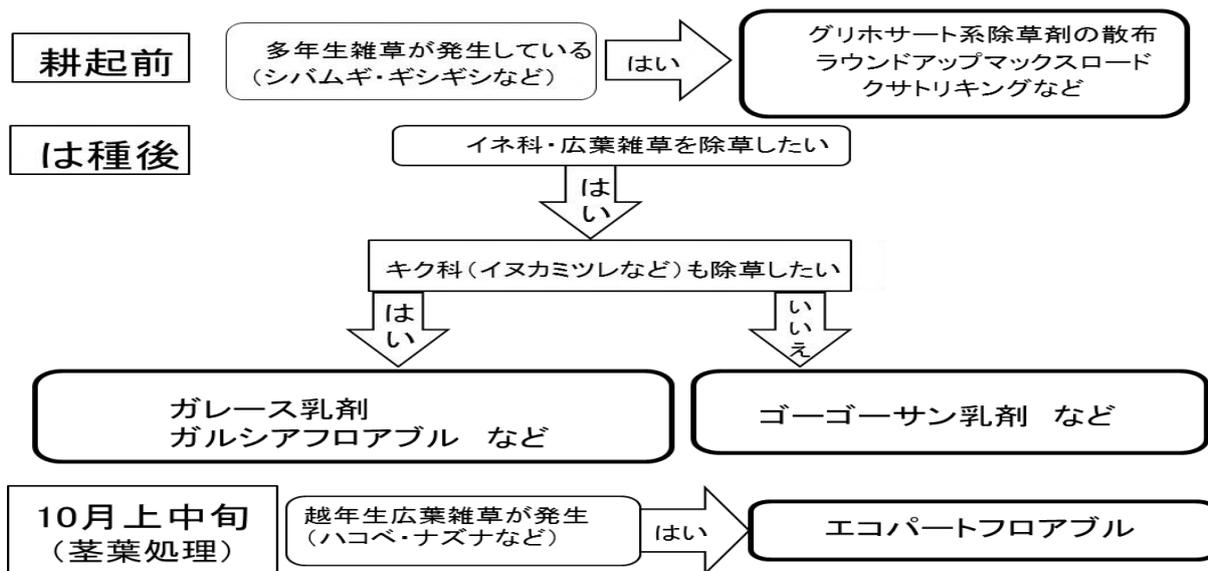
作物名	遅速 日数	生育状況	農作業状況
秋まき小麦	—		
馬鈴しょ(メークイン)	±0	茎長 98.3 (80.1)cm 茎数 3.6 (3.5)本	
馬鈴しょ(男爵)	—	茎長 54.6 (—)cm 茎数 3.2 (—)本	
てん菜(移植)	+1	草丈 68.2 (60.8)cm 葉数 29.7 (28.1)枚 根周 34.3 (34.0)cm	
てん菜(直播)	+1	草丈 67.4 (57.4)cm 葉数 22.1 (24.5)枚 根周 29.3 (28.8)cm	
大豆	+6	草丈 68.3 (74.0)cm 葉数 9.2 (9.7)枚 着莢数 561 (363)個/m ²	
小豆	+2	草丈 56.7(50.9)cm 葉数 9.4(9.6)枚 着莢数 123 (109)個/m ²	
菜豆(金時)	+5	草丈 51.3 (48.1)cm 葉数 4.0 (4.1)枚 着莢数 119 (132)個/m ²	
菜豆(福勝)	—	草丈 50.3 (—)cm 葉数 4.1 (—)枚 着莢数 140.6 (—)個/m ²	
菜豆(手亡)	+5	草丈 42.5 (54.9)cm 葉数 7.1 (7.5)枚 着莢数 218 (186)個/m ²	
牧草	±0	草丈 二番草 74.2 (73.7)cm	
サイレージ用 とうもろこし	+2	草丈 319 (305)cm 出葉数 17.6 (17.1)枚 稈長 279 (273)cm 絹糸抽出期 7/30 (7/31)	
直播たまねぎ	—	球径 78.8 (—)mm	

1 小麦

(1) 雑草対策

次年度産秋まき小麦のは種前後の除草は、優占雑草種に応じた除草剤を選択してください。雑草が小麦に与える害としては「養水分の収奪」「病害虫繁殖の助長」などがあり、結果的に収量、品質の低下に繋がります。除草剤を適正に使用し、雑草対策を行ってください。

<雑草の種類に応じた除草体系例>



★秋まき小麦ほ場のイネ科雑草は越冬後に対処できません。必ず秋処理を行って下さい。

表1 耕起前の除草剤例

農薬名	処理方法・使用時期	薬量 (ml/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップ マックスロード	耕起前・雑草生育期 水量 25~100ℓ	200~500	3回	各薬剤共通 ・多年生雑草が 15cm 以上再生後に散布。 ・展着剤を加用しない。 ・散布後 6 時間は降雨がない日に散布。(ラウンドアップマックスロードは 1 時間、タッチダウン iQ は 3 時間) ・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。
タッチダウン iQ	一年生イネ科雑草 耕起又は播種前 (雑草生育期)	250~500	1回	
	多年生イネ科雑草 耕起 3 日以前 (雑草生育期)	500~1,000		
クサトリキング	多年生イネ科雑草 耕起前まで(雑草生育期草丈 30cm 以下)	250~1,000	3回	
	多年生雑草 耕起 7 日前まで(雑草生育期草丈 30cm 以下)	500~1,000		

(2) 収穫跡地の酸度矯正

低 pH による作物への障害が見られます。今年のうち pH5.5 以上を目標に積極的に酸度矯正を実施し、適正 pH の維持に努めましょう。

(3) 収穫跡地の後作緑肥作付

ア 後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。

イ えん麦野生種には、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もあります。表 2 を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表2 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			すき込み 時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦（一般）	8月上～中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10月 中旬 ～ 10月 下旬
えん麦野生種（ソイルセイバー、サイヤー）		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類(キカラシ)※1、2	8月上～下旬	2	5～8	5～10	0～7	
ひまわり※2	8月上～下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	

※1 そうか病発生ほ場では前作として用いない。

根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※2 キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

2 ばれいしょ

茎葉黄変期は平年並です。いもの肥大状況を確認し収穫作業を進めましょう。

(1) 茎葉処理(生食用、加工用)

ア 処理時期の目安(試し掘り)

生食用：出荷規格に応じた大きさになっていること

加工用：肥大状況・でん粉価が出荷規格に適するものとなっていること

イ 薬剤処理による方法

茎葉枯凋剤の散布は塊茎が目標の大きさに達した時期に、晴天無風の日を選んで散布してください。

表3 茎葉枯凋処理剤

農薬名	使用量(ml /10a)	水量(l /10a)	使用時期	使用回数(以内)
デシカン乳剤	250～450	100	茎葉黄変始～収穫3日前まで	2回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。

※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。

※処理後2～3時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。

※生理的ストレスにより維管束褐変を生じやすいので、土壌が極端に乾燥しているときは使用を避ける。

※散布の際にはドリフトを起こさないように注意。

ウ リーフチョッパーを使用する場合

①茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に作業する。

②塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。

③後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認後処理する。

(2) 収穫作業

ア 収穫作業は茎葉枯凋から、2～3週間後をめぐり、いもの皮むけが生じないことを確認して、晴れた暖かい日に行いましょう。収穫が早すぎると、収量、でん粉価の減少、皮むけなどの障害が発生する可能性があります。

イ 収穫が遅れると、黒あざ病による腐敗、緑化、品質の低下が懸念されます。

ウ 掘り取り後は腐敗を防ぐため、風乾を十分に行ってください。

エ 選別時や網コン等への投入時には、傷、打撲などができないよう注意しましょう。

3 豆 類

豆類全般的に生育、莢の伸長が進んでいます。管理作業や病害虫防除のタイミングが遅れないように注意しましょう。

(1) マメシクイガの防除（大豆）

ア 2回目の防除は1回目の10日後（8月中旬）にを行います。

イ 1回目か2回目にカメムシに効果の高い薬剤を散布すると、同時防除ができます。

表4 マメシクイガの防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	備考
ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回	カメムシ類に対し効果が高い。アブラムシ類に登録あり
スミチオン乳剤	1B	1,000~1,500	21日	4回	カメムシ類に登録あり

(3) 灰色かび病・菌核病の防除（小豆）

現時点では多発は確認されていませんが、湿潤な天候が続いており、灰色かび病・菌核病の発生が懸念されます。降雨による滞水があったほ場では、可能になり次第防除を行ってください。

◎ 小豆防除適期

2回目：1回目防除の10日後

3回目：2回目防除の10日後

表5 小豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除薬剤

回数	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	炭そ病に対する効果
2回目	ブロードワン顆粒水和剤	1・9	1,000	14日	4回	○
	プライア水和剤	10・1	1,000	14日	4回	○
3回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000	7日	3回	○

※ブロードワン顆粒水和剤はチオファネートメチルを含むので、トップジンMとの総使用回数(4回)に注意する。

☆その他登録薬剤については「8/1付技術情報」や「令和4年度農作物病害虫防除基準」参照

(4) インゲンマメゾウムシの防除（菜豆）

インゲンマメゾウムシの成虫は、7月下旬以降に出現し、8月上旬～9月上旬に発生が見られ、成熟の早い菜豆が被害を受けやすくなります。防除時期は、下記を目安にして下さい。

◎ 金時防除適期：莢の色が抜け、白莢が見える時期（8月中旬～）

◎ 手亡防除適期：子実が大きくなり、莢の色が抜けて白莢が見える時期（8月下旬以降、金時から1週間後程度が目安）

表6 インゲンマメゾウムシの防除薬剤例

薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	備考
バイスロイド乳剤	3A	2,000	7日	3回	アブラムシ類に登録あり。
ダントツ水溶剤	4A	2,000	前日	3回	アブラムシ類に登録あり。(2000~4000倍)

(5) ハダニ類の防除(豆類全般)

本年はハダニの発生は比較的少ないですが、高温乾燥になると増殖し多発する可能性もあります。ほ場を観察し、適期防除に努めてください。

表7 ハダニ類の防除薬剤例

作物名	薬剤名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
大豆	トクチオン乳剤	1,000	30日	3回
小豆・菜豆	ダニトロンフロアブル	1,000~2,000	7日	1回

☆トクチオン乳剤はマメシンクイガとの同時防除が可能。

(6) 菜豆類の収穫

本年の成熟期は平年より早い見込みです。収穫準備も早め行いましょう。ほ場毎の登熟状況と天候を見ながら、収穫方法に応じて適期収穫と乾燥調製に努めましょう。

収穫が早すぎると、へこみ・つぶれ粒が発生しやすくなり、収穫が遅れると色流れ粒・裂皮・割れ粒が発生しやすくなります。収穫時には収穫機械、脱穀機の調整を確認するようにしましょう。

○ピックアップ収穫

- ・ 収穫・脱穀適期：完熟期（熟莢率ほぼ100%）から6日以内
- ・ 作業速度：0.7m/s以下
- ・ 倒伏程度によらず収穫が可能（ビーンハーベスタまたはビーンカッタ）

○ダイレクト収穫

- ・ 収穫・脱穀適期：完熟期（熟莢率ほぼ100%）から6日以内
- ・ 作業速度：0.6~0.8m/s（総重量700g/m²以上では0.6m/s未満）
- ・ 倒伏が見られるほ場では、作業機（コンバイン）の速度は0.5m/sで収穫してください。倒伏がひどいほ場では追い刈り収穫を行ってください。

- ・ 脱穀時は子実水分を考慮し、こぎ胴の回転数を調整します。

※26%以上の高水分では押傷・つぶれ粒が多発し、18%以下の低水分ではこぎ胴が低回転でも裂皮粒が多発します。また、適水分（19~23%）でも300回転以上では損傷粒が発生します。

《参考》金時の子実水分の簡易判定基準(H13十勝農試技術普及部)		
子実水分(%)	指で押した場合	爪で押した場合
30	強く押すと弾力性を感じる	爪痕の周囲が広範囲にへこむ
22	強く押すとへこむ	爪痕の周囲が広範囲にへこむ
20	へこまない	爪痕が深くへこむ
18	へこまない	爪痕が浅くへこむ
15	へこまない	爪痕がかすかにつく(完熟)

4 てんさい

生育は平年並です。ほ場を良く観察し病害虫の発生に応じた適期防除に努めてください。

(1) 褐斑病の防除

褐斑病は高温条件で被害が広がります。DMI剤(RACコード 3)およびカスガマイシン剤(RACコード 24)は道内で広く耐性菌の発生が確認されています。

可能な限り使用回数を低減してください。また、DMI剤はマンゼブ剤(RACコード M3)と同時に使用しましょう。

表7 褐斑病防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	浸透移行性	薬剤特性	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
グリーンダイセンM水和剤	M3	500	×	予	21日	5回
ホクガード乳剤	3	1,000~1,500	○	予治	14日	2回
どさんこスター水和剤	3・M3	500	○	予治	21日	4回
カスミンポルドー	24・M1	800~1,000	○	予治	7日	5回

*マンゼブ(RACコード M3)を含む剤の総使用回数は5回まで。

(2) ヨトウガの防除

4齢幼虫以後は薬剤の効果が下がるため、ほ場を観察し、防除適期を逃さないようにしましょう。

表8 ヨトウガ防除例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
カスケード乳剤	15	4,000	7日	4回
マッチ乳剤	15	3,000	14日	2回
ベジホン乳剤	1B・3A	1,000~2,000	21日	4回
オルトラン水和剤	1B	1,000~1,500	45日	3回
トクチオン乳剤	1B	1,000~1,500	30日	2回
ゲットアウトWDG	3A	2,000~3,000	14日	4回
ペイオフME液剤	3A	1,000~2,000	14日	4回

ほのほの情報や農作物防除基準を参考に適正防除に努めてください。